

〔剪花翁傳前編二三月開花〕海棠 花の色淡赤開花三月上旬方日向地二分濕土回塵まひら肥大便寒中入べし、移秋彼岸より寒前までよし、一種すゞしといふあり、蔓長く風搖して櫻の蔓つぎの如し、接つぎいづれも春彼岸切接にすべし。

〔地錦抄三〕海棠るい木春末

海棠花形さくらのごとく色あり 杜子美花形つねのいかいだうのごとくうるはし

實海棠花形まへに同

〔佐渡志五物産〕海紅 通名カイトウ

所々園中ニアリ、垂絲海棠ハ稀ナリ、

〔倭名類聚抄二十〕木瓜 爾雅注云、木瓜一名楸音茂、和名木草、木瓜、毛介、其實如小瓜也。

〔箋注倭名類聚抄十〕按毛介即木瓜之音轉、今俗呼善計略、中釋木云、楸木瓜郭曰、實如小瓜、酢可食、

所引亦蓋舊注略、中毛詩木瓜傳、楸木也、可食之木、齊民要術引詩義疏曰、楸葉似奈、實如小瓜、上黃

似著粉香、吹啖者截著熱灰中、令萎焉、淨洗、以苦酒鼓汁蜜度之、可案酒、密封藏百日、食之甚益人、水

經江水注、故陵村谿、即永谷也、地多木瓜、樹有子大如甌、白黃、實甚芬香、爾雅之所謂楸也、按說文、楸

木盛也、爲木瓜一名者、蓋假借、

〔書言字考節用集六生植〕木瓜博物志、味醇善療、轉筋、如轉筋時、但呼楸名、及書上木瓜字、轉愈、

〔倭訓栞前編三十三〕もけ 倭名抄に木瓜をよめり、音也、今いふ唐ぼけ是也、

〔白石雜考五木瓜考〕木瓜

多識編林道春撰木瓜和名毛介、又云保計、異名楸、具原篤信筑前人曰、木瓜カラボケ、一名楸、稻若

水加賀人曰、木瓜今云カラボケ、舜水朱魯璣大明人、本朝ニ來レリ、曰、木瓜モルメロ有大小不同、

又有長而頭尖者、

右本朝諸家ノ說ヲアハセ考ルニ、源順朝臣ノ說ハ、即異朝ノ木瓜ノ注ニ同ジケレバ、本朝ノ昔ハ

木瓜